

過疎地域において外出を促進する 交流拠点の機能に関する研究

植野 弘子¹・岸 邦宏²・高野 伸栄³

¹学生会員 北海道大学 大学院工学院 (〒060-8628 北海道札幌市北 13 条西 8 丁目)
E-mail: ueno1616rn@eis.hokudai.ac.jp

²正会員 北海道大学教授 公共政策大学院 (〒060-8628 北海道札幌市北 13 条西 8 丁目)
E-mail: kishi@eng.hokudai.ac.jp

³正会員 北海道大学教授 大学院工学研究院 (〒060-8628 北海道札幌市北 13 条西 8 丁目)
E-mail: shey@eng.hokudai.ac.jp

我が国の過疎地域では地域内外の多様な人々の交流拠点を作る取り組みが官民の両面から進められている。しかし都市部のように多種多様な交流拠点をいくつも整備することは難しく、まちづくりの観点からは地域にとって必要なものを効率的に整備することが重要であると考え、本研究は地域住民が訪れたいと考える交流拠点の機能を明らかにし、交流拠点のあり方や来訪促進策を提言することを目的とする。過疎地域である北海道厚真町、石狩市浜益区、士別市を対象に交流拠点や普段の外出行動に関する意識調査を実施し、仮想的な交流拠点の条件下での訪問意向から交流拠点来訪モデルを構築した。その結果、浜益区では話し相手となるスタッフを常駐させ、アクセシビリティを向上させることが交流拠点への外出促進に寄与することが明らかとなった。

Key Words: *depopulated area, community base, regional activation, going-out promotion*

1. 本研究の背景と目的

我が国の過疎地域において、少子高齢化、人口減少、都市部への人口流出などによるまちの衰退が大きな問題となって久しい。北海道においては過疎法に基づき、196 市町村中 152 市町村が過疎地域に指定されており¹⁾各地で地域活性化に向けた取り組みが行われており、地域内外の多様な人々の交流や地域づくりのための交流拠点の整備が進められている²⁾。過疎地域では都市部と比較して、気軽に訪れることのできる外出先の選択肢が少なく、多様な施設の新設・維持は容易ではないため、地域にとって必要なものを効率的に整備することが重要であると考え、本研究は、地域住民が訪れたいと思うような交流拠点の機能を明らかにすることを目的とする。北海道内の4つの地域を対象として、意識調査を行い、交流拠点来訪モデルを構築する。そして来訪意思に影響を与える交流拠点の機能や個人属性に関わる要因を分析することにより、住民の来訪を促進させるような交流拠点のあり方に関して地域ごとに提言する。

住民の外出行動に関する既存研究では、高齢者の健

康増進を目的として外出行動の地域差を分析し、都市部と比較して、町や村の住民の方が友人との交流機会や地縁的活動に参加している人の割合が高いことを明らかにした研究³⁾がある。外出や住民間の交流促進に向けたコミュニティカフェの機能に着目した研究⁴⁾もあるが、本研究は飲食の提供の必要性や、来訪促進に有意な機能の地域差について分析を行っている点に新規性がある。また住民運営の高齢者交流拠点の来訪促進に関する研究⁵⁾では、運営者と行政担当者が綿密に話し合うことや、交流拠点の立ち上げから運営までを金銭面、活動面で支援することの重要性を述べている。本研究とは、住民の来訪を促進させるような機能の分析を行っていない点や、対象地域の人口規模、既存の施設を対象に分析を行っている点が異なる。さらに、様々な人と交流できる居心地の良いまちなかづくりのための「サードプレイス」に着目した研究⁶⁾がある。サードプレイスの所有の有無による個人の幸福度の差や、地域規模による個人の幸福度の大きさの違いに関して分析を行っており、サードプレイスを持つ人は幸福度が高く、サードプレイスの内容には地域差があることを示している。本研究においても、様々な人と交流できる

居心地の良いまちなかづくりに着目しているが、多様な人々との交流の有無に限らず、様々な公共の場を研究対象としている点が本研究とは異なる。

2. 交流拠点への来訪に関する意識調査の実施

(1) 調査票の設計

本研究の対象とする交流拠点は、サークルやイベントの開催場所となる、公共交通機関の待ち時間に利用できる、住民などが気軽に訪れて気ままに過ごすことができる、中心市街地に立地しているような場所と想定している。本研究はそのような交流拠点への来訪モデルを2項ロジットモデルを用いて構築する。交流拠点への来訪意思に影響を与える要因として、表-1の5つを設定し、それぞれ2つの水準を設定した。

これらの要因と水準を L8 直交表に割り付けて、8つの交流拠点パターンを作成した。「飲み物・食事の提供」がない場合は「お酒の提供」もないため、擬因子法を用いて組み合わせを避けて割り付けた。調査票で示した交流拠点のパターンの1つを図-1に示す。

そして意識調査票にて各地域の住民に対して、提示した交流拠点に訪れようと思うかどうか、さらに希望する来訪頻度について伺った。これらの頻度を交流拠点来訪モデルの目的変数として、モデルの構築を行った。

(2) 意識調査の概要

交流拠点への来訪意思や日常生活の外出に関する意識調査を実施した。調査の概要を表-2に示す。本研究では過疎地域である北海道厚真町、士別市、石狩市浜益区、そして石狩市花川地区の4つの地域を研究対象地

表-1 設定した交流拠点の機能の要因と水準

要因	水準 1	水準 2
交流する世代の対象	同世代	多世代
新たな出会い・交流があるか	あり	なし
飲み物・食事の提供があるか	あり	なし
お酒の提供があるか	あり	なし
話し相手となるスタッフがいるか	いる	いない



図-1 設定した交流拠点のパターンの一例

域とし、1世帯2枚ずつ意識調査票を配布した。石狩市は平成17年に浜益村、厚田村と合併しており、花川地区は旧石狩市の中心部である。本研究においては、花川地区は花川北地区、花川南地区の総称とする。また、花川地区は過疎地域ではないが、他地域と結果を比較するために意識調査を実施した。本研究対象地域の地図を図-2に示す。

3. 交流拠点来訪モデルの構築

意識調査にて提示した交流拠点に対して「週1回以上訪れたい」「月1,2回訪れたい」と回答したものを「訪れたい」とし、「訪れようとは思わない」と2つの目的変数による2項ロジットモデルを構築して、交流拠点への来訪確率を推定した。各地域の交流拠点来訪モデルは以下のように推定された。交流拠点来訪モデルの効用関数には、来訪意思に有意な交流拠点の機能に加え、個人の属性や選好も説明変数とした。個人の属性や選好については、意識調査票にて伺った普段の通勤、通院、買い物などの外出状況や、個人属性などのデータを用いた。

(a) 厚真町における交流拠点来訪モデルの効用関数

$$U_{atsuma} = b_1x_{food} + b_2x_{staff} + b_3x_{activ} + b_4x_{cityfreq} + b_5x_{event} + b_6x_{fashion} + b_7x_{covaft} + b_8x_{old} + b_9 \quad (a)$$

表-2 意識調査の概要

研究対象地域	厚真町	士別市	石狩市花川地区	石狩市浜益区
人口(人)	4393	17676	38755	1156
世帯数(世帯)	2114	9068	19419	711
調査日	2021年 11月2日(火)	2021年 11月11日(木)	2021年 11月24日(水)	2021年 11月24日(水)
配布世帯数	1260世帯	960世帯	1000世帯	607世帯
配布方法	郵送配布	投函配布	投函配布	郵送配布
収集方法	郵送回収	郵送回収	郵送回収	郵送回収
世帯回収率(%)	36.6	31.3	31.5	35.6
票回収率(%)	27.5	24.0	24.5	24.6



図-2 意識調査の概要

表-3 厚真町のパラメータ推定結果

係数	説明変数	内容	パラメータ	t値	判定	内容
b1	food	飲み物・食事の提供がある	0.840	4.614	***	機能
b2	staff	スタッフがいます	0.444	2.463	*	機能
b3	activ	定期的な集まりに参加している	0.408	2.187	*	個人属性
b4	cityfreq	厚真市街地へ週1回以上来訪する	0.520	2.561	**	個人属性
b5	event	イベントが好きだ、まあまあ好きだ	0.834	3.690	***	個人属性
b6	fashion	内装がオシャレな施設を訪れたい、まあまあ訪れたい	0.875	2.793	**	個人属性
b7	cov_aft	アフターコロナに、余暇のための外出頻度を増やしたい	0.617	2.902	**	個人属性
b8	old	60代以上である	0.507	2.700	**	個人属性
b9	定数項		-3.951	-9.617	***	
サンプル数		677				
AIC		757				
尤度比		0.212				
修正済み尤度比		0.193				
的中率(%)		71.6				
.:10%有意 * :5%有意 ** :1%有意 *** :0.1%有意						

表-4 士別市のパラメータ推定結果

係数	説明変数	内容	パラメータ	t値	判定	内容
b1	food	飲み物・食事の提供がある	0.841	4.328	***	機能
b2	activ	定期的な集まりに参加している	0.591	3.103	**	個人属性
b3	friend	知り合いを増やしたい	0.872	3.725	***	個人属性
b4	event	イベントが好きだ、まあまあ好きだ	0.793	3.859	***	個人属性
b5	cov_aft	アフターコロナに、余暇のための外出頻度を増やしたい	1.079	4.621	***	個人属性
b6	kids	同居人に子供がいる	-0.681	-2.784	**	個人属性
b7	定数項		-2.984	-10.708	***	
サンプル数		683				
AIC		695				
尤度比		0.281				
修正済み尤度比		0.266				
的中率(%)		75.3				
.:10%有意 * :5%有意 ** :1%有意 *** :0.1%有意						

表-5 浜益区のパラメータ推定結果

係数	説明変数	内容	パラメータ	t値	判定	内容
b1	staff	スタッフがいます	0.729	2.635	**	機能
b2	work	ふだん通勤または通学している	-0.707	-2.565	*	個人属性
b3	citywalk	徒歩で浜益地区へ行く	0.966	1.903	.	個人属性
b4	citycar	自分で運転する車で浜益地区へ行く	0.932	2.191	*	個人属性
b5	friend	知り合いを増やしたい	1.456	4.303	***	個人属性
b6	cov_aft	アフターコロナに、余暇のための外出頻度を増やしたい	1.359	4.867	***	個人属性
b7	multigene	多世代で暮らしている	0.936	2.959	**	個人属性
b8	定数項		-2.265	-4.778	***	
サンプル数		295				
AIC		354				
尤度比		0.173				
修正済み尤度比		0.134				
的中率(%)		62.0				
.:10%有意 * :5%有意 ** :1%有意 *** :0.1%有意						

表-6 花川地区のパラメータ推定結果

係数	説明変数	内容	パラメータ	t値	判定	内容
b1	food	飲み物・食事の提供がある	0.505	3.080	***	機能
b2	work	ふだん通勤または通学している	-0.736	-3.898	***	個人属性
b3	shopcar	自分で運転する車で買い物に行く	0.466	2.478	**	個人属性
b4	friend	知り合いを増やしたい	1.080	5.030	***	個人属性
b5	event	イベントが好きだ、まあまあ好きだ	0.897	4.900	***	個人属性
b6	cov_aft	アフターコロナに、余暇のための外出頻度を増やしたい	0.461	2.292	*	個人属性
b7	old	60代以上である	0.483	2.292	*	個人属性
b8	定数項		-2.463	-8.036	***	
サンプル数		782				
AIC		927				
尤度比		0.160				
修正済み尤度比		0.145				
的中率(%)		67.5				
.:10%有意 * :5%有意 ** :1%有意 *** :0.1%有意						

表-7 来訪意思に有意な交流拠点の機能

	厚真町	士別市	浜益区	花川地区
交流する世代				
新たな出会い・交流				
飲み物・食事の提供	○	○		○
お酒の提供				
話し相手となるスタッフ	○		○	

(b)士別市における交流拠点来訪モデルの効用関数

$$U_{shibetsu} = b_1x_{food} + b_2x_{activ} + b_3x_{friend} + b_4x_{event} + b_5x_{covaft} + b_6x_{kids} + b_7 \quad (b)$$

(c)浜益区における交流拠点来訪モデルの効用関数

$$U_{hamamasu} = b_1x_{staff} + b_2x_{work} + b_3x_{citywalk} + b_4x_{citycar} + b_5x_{friend} + b_6x_{covaft} + b_7x_{multigene} + b_8 \quad (c)$$

(d)花川地区における交流拠点来訪モデルの効用関数

$$U_{hanakawa} = b_1x_{food} + b_2x_{work} + b_3x_{shopcar} + b_4x_{friend} + b_5x_{event} + b_6x_{covaft} + b_7x_{old} + b_8 \quad (d)$$

なお、厚真町のモデルのパラメータ推定結果を表-3、士別市の推定結果を表-4、浜益区の推定結果を表-5、花川地区の推定結果を表-6に示す。

4. 来訪意思に有意な交流拠点の機能と要因に関する地域比較

(1) 交流拠点来訪に関する地域比較

表-7に各地域の来訪意思に有意となった交流拠点の機能を示す。表-1のように設定した5つの機能のうち、「飲み物・食事の提供」が厚真町、士別市、花川地区において、「話し相手となるスタッフ」が厚真町、浜益区において来訪意思に有意となった。人口の多い地域では「飲み物・食事の提供」、少ない地域では「話し相手となるスタッフ」が来訪意思に有意である傾向があると考えられる。

表-8に各地域の来訪意思に有意となった個人属性に関する要因を示す。全地域においてアフターコロナで外出頻度を増やしたいと考えている人は、交流拠点来訪意思があることが分かった。また、厚真町、士別市、花川地区においては、「イベントが好きだ、まあまあ好きだ」と答えた人が交流拠点への来訪意思に有意であり、かつt値が大きいこと、個人のイベントに対する関心の大きさが交流拠点への来訪意思に与える影響は大きいと言える。

表-8 来訪意思に有意な個人属性

内容	○:正のパラメータ,△:負のパラメータ			
	厚真町	士別市	花川地区	浜益区
ふだん通勤または通学をしている			△	△
自分で運転する車で買い物に行く			○	
定期的な集まりに参加している	○	○		
徒歩で中心市街地へ行く				○
自分で運転する車で中心市街地へ行く				○
中心市街地へ週1回以上来訪する	○			
知り合いを増やしたい		○	○	○
イベントが好きだ、まあまあ好きだ	○	○	○	○
内装がオシャレな施設を訪れたい、まあまあ訪れたい	○			
アフターコロナに、余暇のための外出頻度を増やしたいと思っている	○	○	○	○
60代以上である	○		○	
同居人に子供がいる		△		
多世代で暮らしている				○

(2) 交流拠点の機能による来訪確率の変化

各地域における来訪意思に有意となった交流拠点の機能の有無による来訪確率、またその変化量について分析を行った。なお厚真町においては、「飲み物・食事の提供」と「話し相手となるスタッフ」の2つの機能が来訪意思に有意となったが、着目していない方の機能は整備されているものとして、来訪確率の推定を行った。

図-3 に「飲み物・食事の提供」の整備による来訪確率の変化を示す。厚真町と土別市では「飲み物・食事の提供」がある場合、来訪確率が約 0.20 上昇するが、花川地区では 0.10 の上昇に留まり、来訪確率自体も他地域と比較して小さい。

図-4 に「話し相手となるスタッフ」の配置による来訪確率の変化を示す。「話し相手となるスタッフ」がいると、厚真町では来訪確率は 0.10 ほど上昇する。浜益区では整備前においても他地域と比較して来訪確率は高いが、整備後の来訪確率は約 0.65 であり、来訪意思に有意な機能を整備することの重要性が示された。

5. 過疎地域の交流拠点のあり方に関する分析と提案

(1) 厚真町における今後の交流拠点のあり方

厚真町の中心市街地には図-5 に示すような、「イチカラ」という厚真町において来訪意思に有意となった

「飲み物・食事の提供」、 「話し相手となるスタッフ」の2つの機能が備わっている交流拠点が存在する。「イチカラ」は北海道胆振東部地震を機に、町内のコミュニティの垣根を越えて様々な人と繋がることができたり、居心地が良いと感じることができたりする場所を作りたいと地元の若者が考えたことが設立のきっかけとなり、2020年6月にオープンした施設である。

図-6 は厚真町の回答者の定期的な集まりへの参加状況を示している。30代の参加状況が高く、これは他の3地域と比較して厚真町特有の結果である。また、「イチカラ」は図-5 に示すようにおしゃれな内装が特徴的であり、図-7 は年齢別の内装がおしゃれな施設への関心の違いを示したものであるが、若い世代ほどおしゃれな内装への関心が大きいことが明らかとなった。



図-5 「イチカラ」の内観

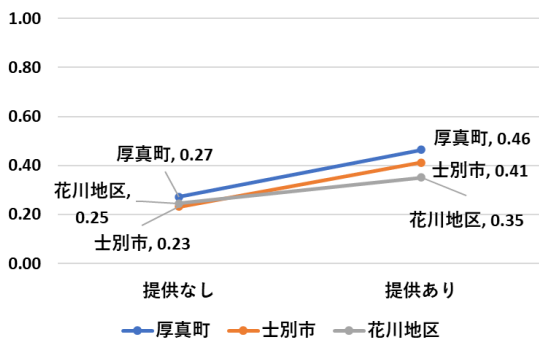


図-3 飲み物・食事の提供の有無による来訪確率の変化

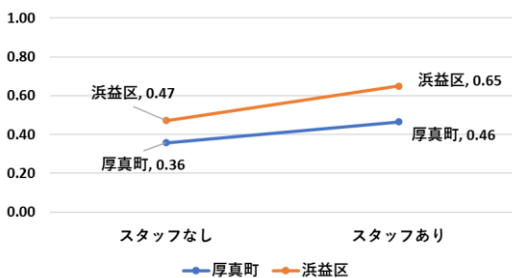


図-4 話し合いとなるスタッフの配置による来訪確率の変化

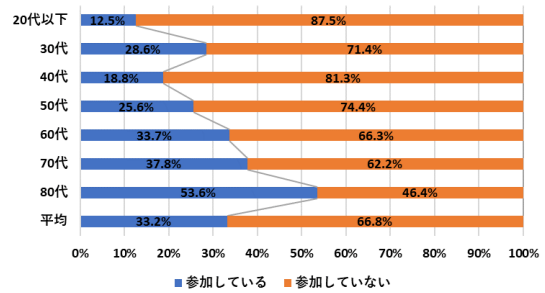


図-6 厚真町における定期的な集まりへの参加状況

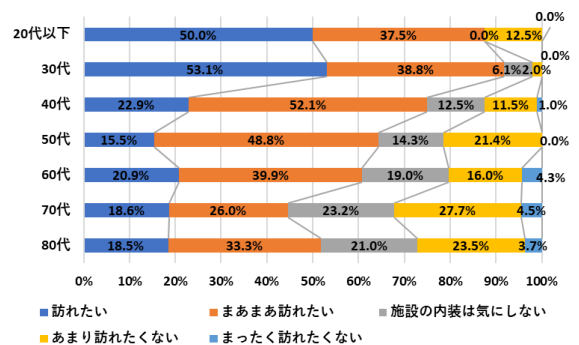


図-7 厚真町における年齢別の内装がおしゃれな施設に対する考え方

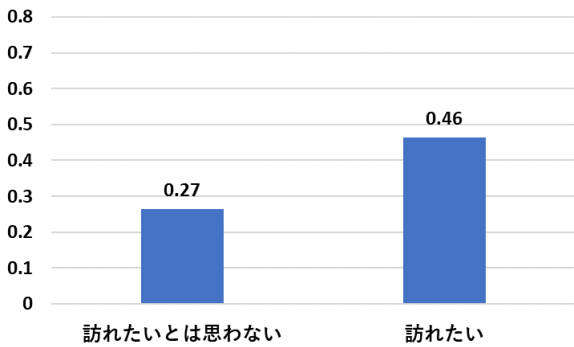


図-8 厚真町におけるおしゃれな内装への関心による来訪確率の比較

そして図-8 は厚真町におけるおしゃれな内装の施設に訪れたいと思う人と思わない人の来訪確率の比較である。「イチカラ」は「飲み物・食事の提供」と「話し相手となるスタッフ」は備わっているため、これらの機能はあるものとして来訪確率を推定した。内装がおしゃれな施設に訪れたいと思う人の来訪確率は、訪れたいと思わない人の来訪確率より 0.20 ほど高い。これらのことより、「イチカラ」は厚真町の住民、特に若い世代の来訪を促すような施設であると考えられる。

以上より厚真町では今後も「イチカラ」を地域の交流拠点として活用していくことを提案する。そして、飲食の提供の拡充、より一層若い世代に向けて定期的な集まりがあるようなイベントの開催場所や友人との交流場所として来訪を促すことを提案する。

(2) 士別市における今後の交流拠点のあり方

士別市の中心市街地には、図-9 に示すような「道の駅 羊のまち・侍しべつ」という、士別市において来訪意思に有意となった飲み物・食事の提供の機能が備わっている交流拠点が存在する。「道の駅 羊のまち・侍しべつ」は気軽に出かけ多世代が交流できるまちなかづくり⁸⁾を目指して2021年5月にオープンした施設である。士別市や近隣都市、姉妹都市の特産品を販売するアンテナショップ、高速バスのバス停などが整備されており、市外からも多くの人を訪れるような拠点である。加えて、観光客と住民が交流することのできるような交流スペースも設けられている。しかし、来訪意思に有意な個人属性である「イベントが好きだ」という人の来訪を促すような、イベントや展示会を実施することができるようなスペースが備わっていない。

また図-10 は士別市における定期的な集まりに参加している人と参加していない人の交流拠点への来訪確率の比較を示したものであるが、定期的な集まりに参加している人はそうでない人と比較して来訪確率が 0.15 高くなることが明らかになった。



図-9 「道の駅 羊のまち・侍しべつ」の外観

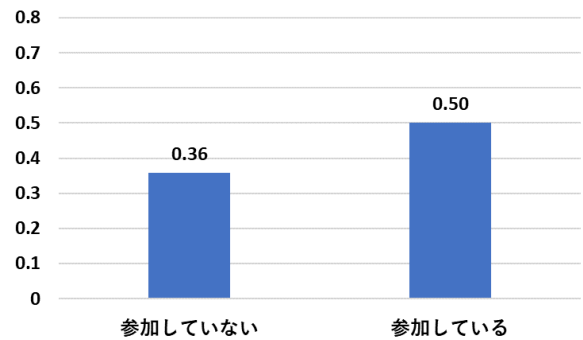


図-10 士別市における定期的な集まりへの参加状況による来訪確率の比較

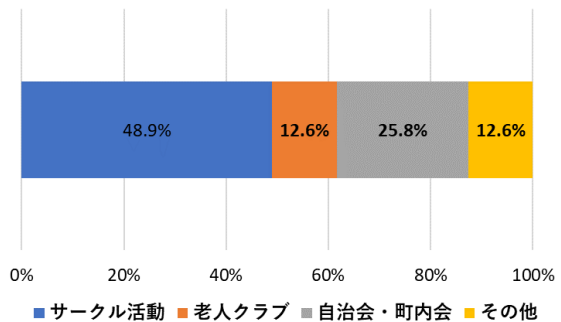


図-11 士別市における定期的な集まりに参加している人の集まりの内容

以上より士別市においては今後も「道の駅 羊のまち・侍しべつ」を交流拠点として活用していくことを提案する。そして来訪促進策として、イベントや作品展示スペースの設置や、定期的な集まりの開催場所としての利用を提案する。図-11 は士別市において定期的な集まりに参加する人の活動内容を示したものであるが、参加すると回答した人のうち約半数の人は、その内容としてサークル活動をあげたため、サークル活動の開催場所や発表場所として拠点の利用を促すことは来訪促進に有効だと考える。

さらに本拠点は交通結節点として整備が進められているが、士別市では本拠点の敷地外にも高速バスの乗降場が存在する⁹⁾。よって乗降場の集約を図るなど、交通結節点としての機能を高めることも提案する。

(3) 浜益区における今後の交流拠点のあり方

現在、浜益区の中心市街地には交流拠点は存在していないが、住民の来訪意思に有意な機能が備わっている交流拠点を仮定した場合、本研究対象地域の中で交流拠点への来訪確率が最も高いことが明らかとなった。

また浜益区においては、「徒歩で中心市街地へ行く」、「自分で運転する車で中心市街地へ行く」人が交流拠点への来訪意思に有意な結果となった。図-12 は各地域の市街地への来訪手段の割合を示したものである。浜益区は他地域と比較して、徒歩や自家用車の利用者の割合が小さく、デマンドバスの利用者の割合が大きいことが分かり、自分一人で好きなタイミングで移動することができる人の割合が低い結果となった。そして図-13 は浜益区における市街地来訪手段として自分で運転する車を利用する人とそうでない人の来訪確率の比較を示したものである。両者の来訪確率には0.20以上の開きがあることが明らかになった。これらの結果より、浜益区においては利便性の高い移動手段の提供は交流拠点への来訪確率を増加させることに有効だと考えられる。

また浜益区は他の研究対象地域と比較して、唯一「飲み物・食事の提供」が来訪意思に有意にならず、「話し相手となるスタッフ」のみが来訪意に有意となり、住民は交流拠点に対して「飲み物・食事の提供」より、「話し相手となるスタッフ」を求めているとい

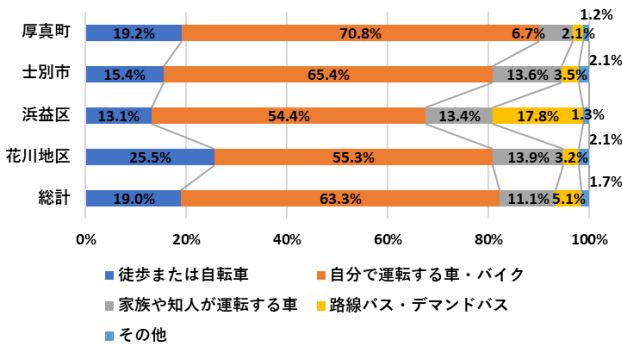


図-12 各地域の市街地へ来訪する際の交通手段

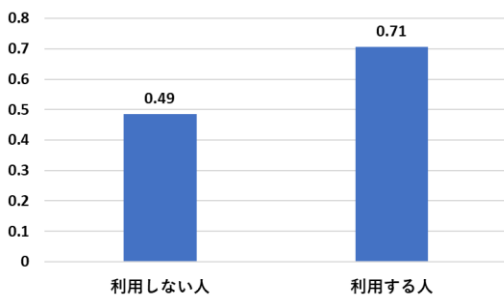


図-13 浜益区における市街地来訪手段に自分で運転する車を利用する人としない人の来訪確率の比較

うことが明らかになった。この理由について次のように考察する。

図-14 は各研究対象地域の住民の同居家族の有無の割合を示したものである。浜益区は他の地域と比較して、同居家族がいない人、すなわち一人暮らしの人の割合が高いことが分かる。つまり浜益区は自宅で話し相手がない人の割合が高く、彼らは直接誰かと会話をするためには外出する必要があると言える。

図-15 より、浜益区の住民は他地域と比較して、友人や知人を互いの家に招いて交流している頻度が多いことが分かる。現在浜益区では喫茶店は存在せず、飲食店は数店舗あるのみであり、直接誰かと会って会話することができる場所が少ない。この現状は友人や知人を互いの家に招いて交流している頻度を大きくさせる一因であると考えられるが、他地域と比較して頻度が大きいということは、場所の確保が難しい中でも会話したい、交流したいという意思の大きさが示唆される。さらに図-12 より、浜益区の住民は他地域と比較して自分で運転する車で市街地へ訪れる人の割合が低く、移動の足の確保が困難であると言える。しかしその中でも友人や知人を互いの家に招いて交流する頻度が大きいことは、会話をしたい意思の大きさによるものだと考えられる。

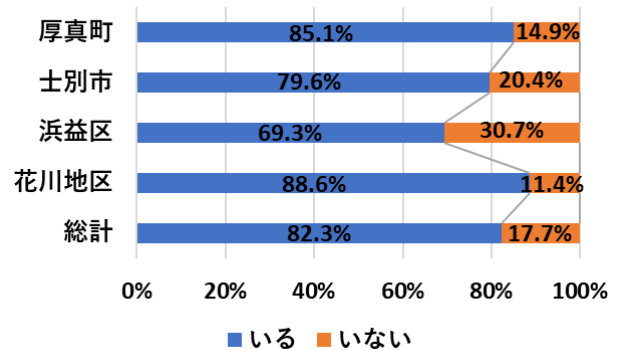


図-14 各地域における住民の同居家族の有無

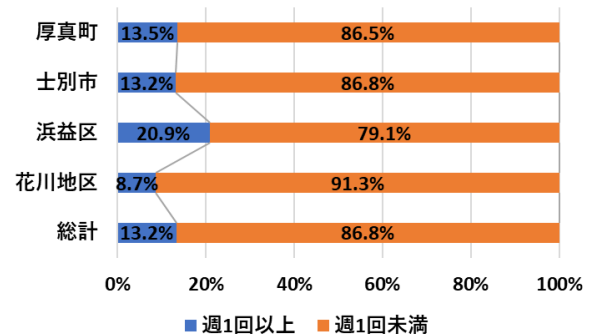


図-15 各地域における住民の友人・知人と互いの家で交流を行う頻度

以上より、浜益区における今後の交流拠点のあり方として、中心市街地に交流拠点を設け、来訪意思に有意な機能である「話し相手となるスタッフ」を常駐させることを提案する。そして来訪促進策として、公共交通サービスレベルの向上を提案する。浜益区では現在路線バスは運行しておらず、ワゴン車によるデマンド交通¹⁰が運行されている。平日のみの運行であり、乗車には前日までの予約が必要である。また運行本数は1日8本であるが、曜日によってルートが変更されているため、各地区の住民が利用することのできる便はさらに少ない。このような現状を踏まえ、浜益区の交流拠点は交通結節点として活用させ、利便性を向上させることを提案する。そのような整備をすることで、地域住民だけでなく外部から浜益へ来訪する人も訪れやすく、地域内外の多様な人々の交流が活性化されることが考えられる。また、来訪意思に有意な個人属性である、「知り合いを増やしたい」人の来訪も促すことができるような拠点となると考える。

6. おわりに

本研究では、交流拠点来訪意思決定モデルを構築し、住民の来訪意思に影響を与えるような交流拠点の機能や要因を明らかにした。また、複数の過疎地域を対象に分析を行い、それらの地域差・共通点も明らかにした。そして、各地域における交流拠点のあり方の提言を行った。

今後の課題として、北海道内の他の過疎地域における整備すべき機能の体系化をあげる。本研究では人口規模によって、住民の来訪意思に有意な交流拠点の機能は異なる傾向にあることを明らかにした。よって他

の過疎地域に対し同様の調査を行い、地域ごとに整備すべき機能を分析するのではなく、地域特性に基づいて該当地域を分類し、本研究対象地域と同様の機能を求める地域のグループが存在するののかについて分析を行うことができると考える。そのようなグループが存在する場合、意識調査を実施せずとも、各地域が求める交流拠点の機能を推定することが可能となると考える。

参考文献

- 1) 北海道庁：北海道の過疎対策について，2022.
- 2) 国土交通省国土政策局：「小さな拠点」づくりガイドブック，2015.
- 3) 内閣府：まち・ひと・しごと創生基本方針2021，2021.
- 4) 斎藤民，近藤克則，村田千代栄，鄭丞媛，鈴木佳代，近藤尚己：高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差，第62巻日本公衛誌，第10号，pp.596-608，2015.
- 5) 山崎康平，岸邦宏：過疎地域におけるコミュニティカフェによる外出促進効果に関する研究，土木計画学研究・講演集，Vol.48，CD-ROM，2013.
- 6) 尾澤俊，藤井さやか：私有空間を利用した住民運営型の高齢者交流拠点づくり促進策の成果と課題，都市計画論文集，Vol.56，No.3，pp.1253-1260，2021.
- 7) 橋本成仁，今村陽子，海野遥香，堀裕典：地域差とコロナ前後の比較によるサードプレイスと幸福感の関連性の研究，都市計画論文集，Vol.56，No.3，pp.827-833，2021.
- 8) 士別市：士別市立地適正化計画，2019.
- 9) 士別市：都市間バス/都市間高速バス 乗降場所・時刻表，2022.
- 10) 石狩市：みんなで乗ろう！浜厚線！，2016.

(?)

FUNCTION OF COMMUNITY BASES TO PROMOTE GOING OUT IN DEPOPULATED AREAS

Hiroko UENO, Kunihiro KISHI and Shinei TAKANO

In depopulated areas in Japan, efforts are being made by both the public and private sectors to create community bases for various people from within and outside the region. However, it is difficult to establish a large kind or number of them as in urban areas. Therefore, it is important to efficiently establish the ones that are necessary for the local community from the perspective of town Planning. The purpose of this study is to clarify the functions of the community bases that local residents would like to visit, and to propose how the community bases should be and what measures should be taken to promote visitation. We conducted an attitude survey on community bases and daily outing behavior in depopulated areas of Atsuma Town, Hamamasu Ward, Ishikari City, and Shibetsu City, Hokkaido, and constructed a model for visiting community bases based on the intention to visit under the conditions of hypothetical community bases. As a result, it became clear that in Hamamasu Ward, having a staff member who can always talk to people and improving accessibility would contribute to the promotion of going out to the community base.